

月報

国立国会図書館



震災を記録する

国立国会図書館デジタルコレクションに見る震災の記録

国立国会図書館東日本大震災アーカイブ（愛称：ひなぎく）

阪神・淡路大震災における神戸大学附属図書館「震災文庫」の取り組みを中心に
東日本大震災アーカイブ宮城の取り組み

長谷川武次郎のちりめん本 *The Smiling Book* の下絵をめぐって

2016.3
No. 659

国立国会図書館利用案内

東京本館

所在地 〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1
電話番号 03(3581)2331
利用案内 03(3506)3300(音声サービス)
ホームページ <http://www.ndl.go.jp/>
利用できる人 満18歳以上の方
ただし、満18歳未満の方には、個別に相談に応じています。詳しくはホームページをご覧ください。
資料の利用 館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休館日 日曜日、国民の祝日・休日、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
おもな資料 和洋の図書、和雑誌、洋雑誌(年刊誌、モノグラフシリーズの一部)、和洋の新聞、各専門室資料

サービス時間

開館時間	月～金曜日 9:30～19:00 土曜日 9:30～17:00 ※ただし、音楽・映像資料室、憲政資料室、古典籍資料室の開室時間は17:00までです。	即日複写受付	月～金曜日 10:00～18:00 土曜日 10:00～16:00 後日郵送複写受付★	月～金曜日 10:00～18:30 土曜日 10:00～16:30
資料請求受付★	月～金曜日 9:30～18:00 土曜日 9:30～16:00 ※ただし、音楽・映像資料室、憲政資料室、古典籍資料室の資料請求時間は16:00までです。			

★登録利用者限定のサービスです。

■見学のお申込み／国立国会図書館 利用者サービス部 サービス運営課 03(3581)2331 内線25211

関西館

所在地 〒619-0287 京都府相楽郡精華町精華台8-1-3
電話番号 0774(98)1200(音声サービス)
ホームページ <http://www.ndl.go.jp/>
利用できる人 満18歳以上の方
ただし、満18歳未満の方には、個別に相談に応じています。詳しくはホームページをご覧ください。
資料の利用 館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休館日 日曜日、国民の祝日・休日、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
おもな資料 和図書・和雑誌・新聞の一部、洋雑誌、アジア言語資料・アジア関係資料(図書、雑誌、新聞)、科学技術関係資料、文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書、博士論文

サービス時間

開館時間	月～土曜日 10:00～18:00	即日複写受付	月～土曜日 10:00～17:00
資料請求受付★	月～土曜日 10:00～17:15	後日郵送複写受付★	月～土曜日 10:00～17:45
セルフ複写受付	月～土曜日 10:00～17:30		★登録利用者限定のサービスです。

■見学のお申込み／国立国会図書館 関西館 総務課 0774(98)1224 [直通]

国際子ども図書館

所在地 〒110-0007 東京都台東区上野公園12-49
電話番号 03(3827)2053
利用案内 03(3827)2069(音声サービス)
ホームページ <http://www.kodomo.go.jp/>
利用できる人 どなたでも利用できます。
資料の利用 館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休館日 月曜日、国民の祝日・休日(5月5日こどもの日は開館)、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
※児童書研究資料室は、システムメンテナンス等のため臨時休室することがあります。
おもな資料 国内外の児童図書・児童雑誌、児童書関連資料

サービス時間

開館時間	火～日曜日 9:30～17:00		
児童書研究資料室の資料請求受付	火～日曜日 9:30～16:30		
複写サービス時間	即日複写受付	火～日曜日 10:00～16:00	後日郵送複写受付 火～日曜日 10:00～16:30
	複写製品引渡し	火～日曜日 10:30～12:00 13:00～16:30	

■見学のお申込み／国立国会図書館 国際子ども図書館 03(3827)2053 [代表]

C O N T E N T S

02 通信（郵便）地図 その手紙が辿る距離をはかる

今月の一冊 国立国会図書館の蔵書から

04 震災を記録する

国立国会図書館デジタルコレクションに見る震災の記録

12 国立国会図書館東日本大震災アーカイブ（愛称：ひなぎく）

14 阪神・淡路大震災における神戸大学附属図書館「震災文庫」の取り組みを中心に

18 東日本大震災アーカイブ宮城の取り組み

22 長谷川武次郎のちりめん本 *The Smiling Book* の下絵をめぐって

20 館内スコープ

再び動き出すために記録する

21 本屋にない本

○『忘れない、明日のために。復興へのメッセージ
新潟県中越大地震復興10年記録集』

29 NDL NEWS

- 法規の制定
- 第7回科学技術情報整備審議会

31 お知らせ

- 子どものへや・世界を知るへやリニューアルオープン
- 国際子ども図書館リニューアル記念展示会「現実へのまなざし、夢へのつばさ：現代翻訳児童文学の半世紀」
- 講演会「私が子ども時代に出会った本—中島京子」
- 新刊案内 国立国会図書館の編集・刊行物

通信（郵便）地図 その手紙が辿る距離をはかる

伊藤 直美

『旧麹町区全図』

東京都千代田区東京中央局
郵便区市内図・麹町局郵便
区市内図・昭和27年6月
22日～7月2日現在』

郵政省〔著〕郵政弘済会
1952.10 地図2枚（1図）
58×77 - 67×77cm
＜請求記号 YG12-Z-769＞

1『日本橋[1947]』戦災復興院
〔著〕日本地形社 1947.5

＜請求記号 YG1-Z-1.0-50-2-25＞

2『四谷[1947]』戦災復興院〔著〕
日本地形社 1947.5

＜請求記号 YG1-Z-1.0-50-6-5＞

3本図は、昭和21年刊戦災復興院作成1万分の1地形図『日本橋』『四谷』を基礎資料としている旨、記載あり。

4『京橋局郵便区市内図・日本橋局郵便区市内図 東京都中央区。昭和58年8月1日～4日現在』

〔郵政省〕〔著・刊〕[1983]
＜請求記号 YG12-Z-7060＞

5長沢光邦「通信地図よもやまばなし」（『測量：地理空間情報の科学と技術』12（3）1962.3
＜請求記号 Z16-136＞）より

6「座談会 郵便地図のできるまで」（『通信協会雑誌』（791）1977.4
＜請求記号 Z5-58＞）より

○参考文献

『通信法規類纂郵便編 上巻』
通信省通信局 明治39年
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1086944>

リサーチ・ナビ「通信地図（郵便地図）」http://navi.ndl.go.jp/research_guide/entry/post-575.php

図の中に、たくさんの数字が書き込まれている。これは、住所の番地だろうか。いや、これは、区画ごとの道の距離を表した数字で、単位はメートル。びっしりと並んでいるこれらの数字は、この地図のアイデンティティだ。

本図は、通信（郵便）地図と呼ばれるものの。日本国内の集配郵便局ごとに作成された地図で、二万五千分の一の「郵便区全図」（北海道については四万分の一）と、五千分の一の「郵便区市内図」の2種類があり、後者は、世帯数が800戸を超える地域についてのみ作成されている。国立国会図書館では、昭和24（1949）年～昭和63（1988）年の「郵便区全図」9千枚、「郵便区市内図」3千枚弱を所蔵しており、本図は、昭和27年の東京中央局・麹町局が所管する皇居周辺のものだ。

通信（郵便）地図の歴史は、明治37（1904）年12月1日から始まる。公達714号「通信地図規程」により、日本国内の郵政事業の企画・事務に資するため、全国的に通信（郵便）地図を作成することが決まった。規程では、地図上に、郵便区界（集配業務のために定めた区域の境界）、地名、部落ごとの戸数、郵便関連施設、道路の距離などを記載するように定めていた。その後、業務上、どれだけの人力と設備が必要なのかという基礎情報を集約した地図として、長く一般には非公開だったが、昭和24年10月郵政弘済会から市販されるようになった。

本図を見てみると、上記の情報のほか、官公庁、企業、商業施設や、郵便差出箱（ポスト）の場所、階段、地下道、公園内を通り抜ける通路など、集配業務に大きな影響を与える情報③が記載されているのがわかる。

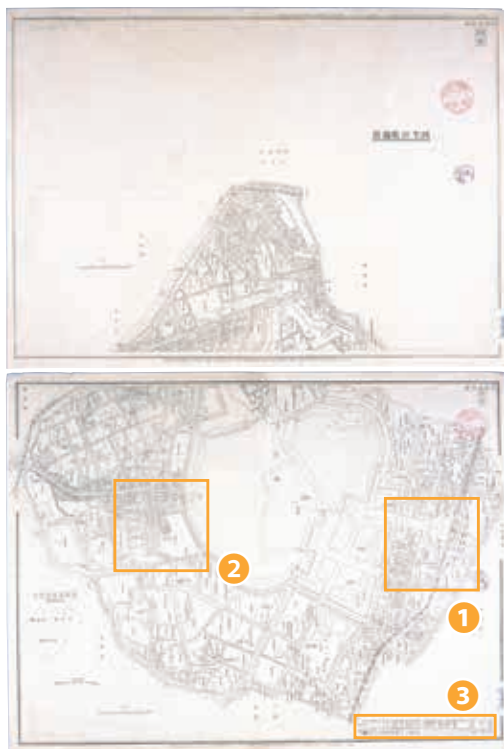
実際に、同時期の『日本橋[1947]』¹、『四谷[1947]』²と比べてみると³、路地や神社内の石段、東京駅を横切る通路①などが補足されたり、逆に、駐留軍用地の中の道②などが省略されていて、郵便物の集配に特化された地図の面白さを、発見することができる。後年になると、ビルの階数も加わる。ただし、番地や居住者名の表示はなく、住宅地図の代用としては期待できない。

その他、一風変わったものに、地下街の地図がある。『京橋局郵便区市内図・日本橋局郵便区市内図 東京都中央区。昭和58年8月1日～4日現在』⁴には、分図として「八重洲地下街図」が収録されている。集配範囲であれば、地下街でも、地図の作成対象だったことがうかがわれる。

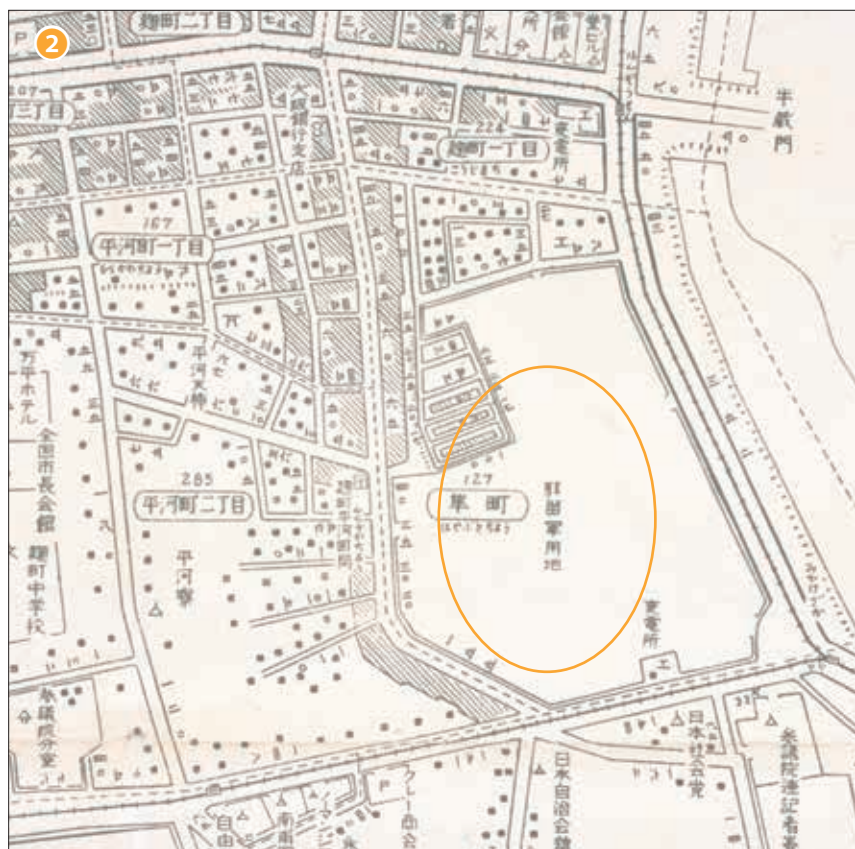
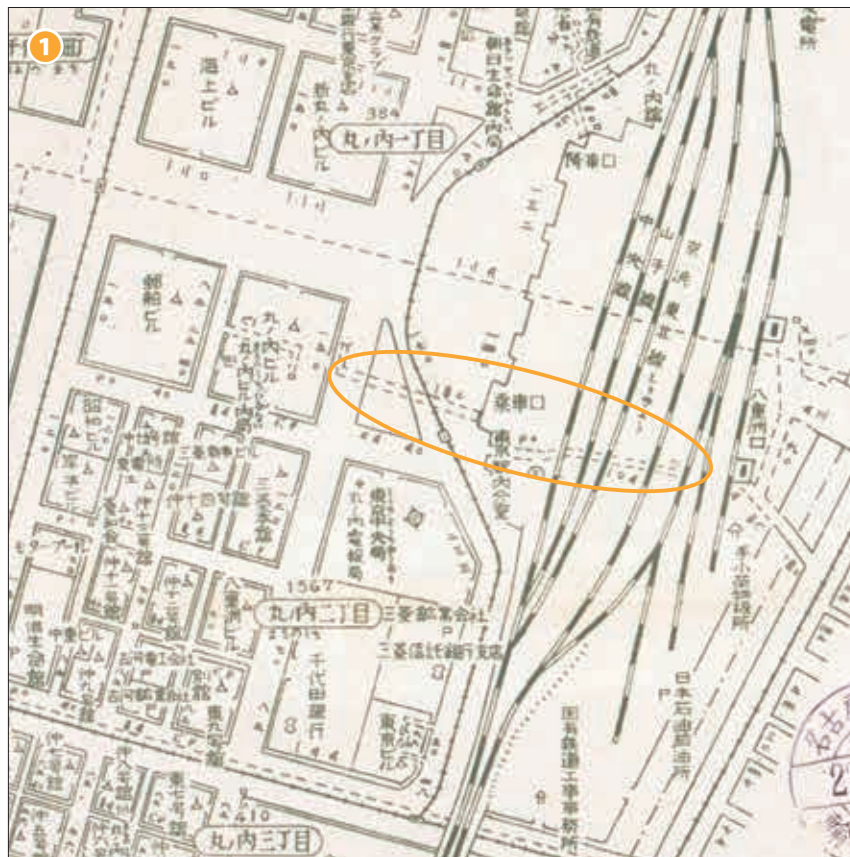
なお、これらの地図の作成・更新のためには、専門の技官もいた。往時の雑誌には、「測量屋はポールをもつたり器械をかついだり、夜は夜でソロバン片手に誤差はどうの、明日はどこまでやろうとか」⁵「世間ではよく地図にもない場所なんて言いますが、（中略）そういう所でも、それは一応その局区内ですから、われわれは測量にはいくんです。（中略）人が住むところならどこまでも」⁶といった測量の様子も掲載されている。

地図を眺めていると、重要な通信網としての責務を負っていた郵便に対する、こうした関係者の熱意が伝わってくる。消耗品として失われがちだった通信（郵便）地図。奇跡的に残っているこれらの地図を、大切に受け継ぎ、また後世に受け渡すことが、我々の責務である。

（いとう なおみ 利用者サービス部人文課）



(全体図)



参考：

(上)『日本橋[1947]』戦災復興院〔著〕 日本地形社

(下)『四谷[1947]』戦災復興院〔著〕 日本地形社



震災を記録する

国立国会図書館デジタルコレクションに見る

震災の記録

日本人は昔から地震とともに暮らしてきました。古代においては、地震は「なる」と呼ばれ、地震が起こることを「なるふ」と表現しました。文字を使用するようになって以来、日本人はいくつもの地震の記録を残してきましたが、その最も古いものは、『日本書紀』にある允恭天皇5年7月14日（現在の暦では416年8月23日）に起こった地震についての記録であるといわれています。今回は、「国立国会図書館デジタルコレクション」でご覧いただける日本の震災の記録の一部をご紹介します。



『日本書紀』（第13巻）

インターネット公開
pid/2544345/40



『日本三代實録』（第16巻）

貞観11年5月26日（現在の暦では869年7月13日）夜に、M8.3～8.4の巨大地震とそれに伴う大津波が陸奥国で発生し、大きな被害をもたらしました。

インターネット公開
pid/2573125/77



鯨退治『安政大地震絵』所収

地震で被害を受けた人々が、包丁や木槌などを手にとって、まな板の上に乗せられた鯨をこらしめています。

インターネット公開
pid/1303363

資料を見てみよう！

この記事で紹介する資料は、デジタル化され、国立国会図書館デジタルコレクションに収録されています。資料の公開範囲・利用方法は、資料の著作権等の権利状態、確認状況等によって異なります。資料が「インターネット公開」の場合、以下のようにURLを入力することで、検索しなくても資料に直接アクセスできます。

<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2544345/40>

公開範囲の種類^{*1}



インターネット公開
pid/2544345/40

インターネットを通じてどなたでもご覧いただけます^{*2}。



図書館送信資料
pid/1677821/153

当館内（東京本館、関西館、国際子ども図書館）と当館の承認を受けた公共図書館・大学図書館等の施設内でご覧いただけます。



館内限定
pid/1579523/19

当館内でのみご覧いただけます。

^{*1} 公開範囲は2016年2月1日時点のものです。調査により公開範囲が変動する可能性があります。

^{*2} 著作権保護期間が満了し公開しているもの以外に、文化庁長官の裁定により公開しているもの、権利者の許諾を得て公開しているものがあり、これらについては複写・印刷等に制限がある場合があります。

国立国会図書館デジタルコレクションについて

国立国会図書館デジタルコレクション（<http://dl.ndl.go.jp/>）は、国立国会図書館で収集・保存しているデジタル資料を検索・閲覧できるサービスです。図書、雑誌、古典籍（貴重書など）、歴史的音源など、さまざまな資料をご利用いただけます。



図書館送信資料について

「図書館向けデジタル化資料送信サービス」に参加する全国600館以上の図書館で、国立国会図書館デジタルコレクションを通じて利用できます。参加館はhttp://dl.ndl.go.jp/ja/soshin_librarylist.htmlをご覧ください。

幕末の地震と鯰絵

日本には、古くから地震を観察し記録したものは多くありましたが、地震についての科学研究が本格的に行われることはありませんでした。17世紀以降、地震やその原因を説明した書物が多数出版されますが、それらは古来の中国の陰陽説や16世紀以降にヨーロッパから伝わった古代ギリシャのアリストテレスの説を元にしたものでした。やがて物理学や化学が発展したヨーロッパでは、地下の熱・電気・硫黄などの爆発物が原因であるという説が生み出され、19世紀の日本へ伝わります。新たな説が主流となりつつあった安政2年10月2日（現在の暦では1855年11月11日）の夜、直下型の大地震が江戸の町を襲いました（安政江戸地震、M7.0～7.1）。前年の安政東海地震・安政南海地震（ともにM8.4）に続くこの大地震は、人々の地震への関心を高め、様々な地震説・防災説が出されました。

鯰絵とは、安政江戸地震の際に広く出回った一枚摺りの木版画です。地中の大鯰が暴れると地震が起きるという迷信は江戸時代には一般に広まっていました。死者約7千人強、倒壊1万4千戸という悲惨な地震であったにもかかわらず、その元凶とされた大鯰は、神様や民衆に懲らしめられたり、世直しを行ったりと、多くの場合はユーモラスな姿で描かれています。鯰絵を多く所収したものとして、国立国会図書館デジタルコレクションでは、『安政大地震絵』、『江戸大地震之絵図』等がご覧いただけます。



恵比寿天申訳之記『江戸大地震之絵図』所収

神無月に地震が起こったため、留守番をしていた恵比寿が今回暴れた地震鯰を引き連れ、鹿島大明神に申し開きをしています。

インターネット公開
pid/1302071



『俗語之種』初編之4

弘化4年3月24日（現在の暦では1847年5月8日）の善光寺地震で発生した火災の状況が描かれています。

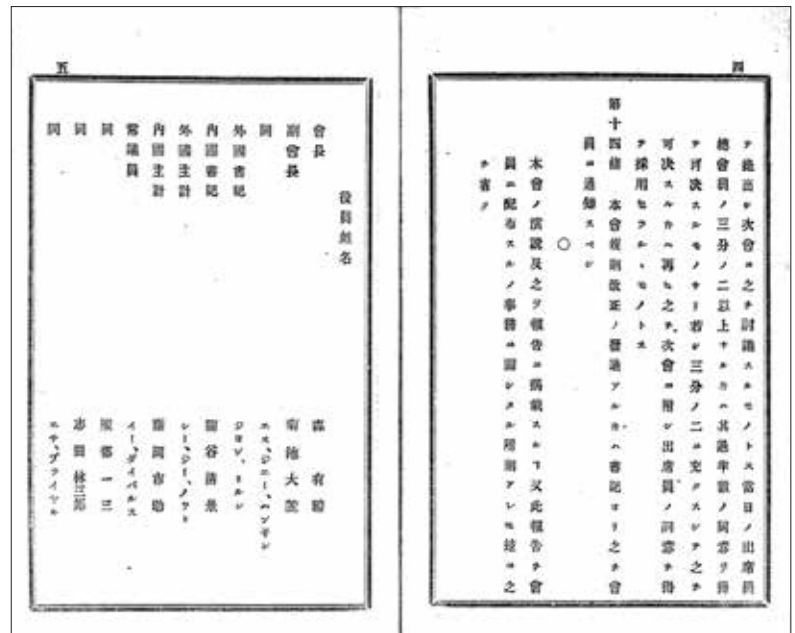
インターネット公開
pid/2578789/10

日本地震学会の創立と 地震観測網の広まり

明治13（1880）年2月に発生した横浜地震を契機として、日本地震学会が設立されました。中心になったのは、フルベッキ（G.F.Verbeck：1830～1898）、ミルン（John Milne：1850～1913）、ユーイング（J.A.Ewing：1855～1935）、 그레이（T.Gray：1850～1908）ら在京の外国人教師や外国人技術者たちでした。当時、ヨーロッパでは地震波を使った地球内部構造の研究が行われていましたが、地震が頻発する日本では、地震という自然現象の解明そのものに重点がおかれました。今日、P波・S波と呼ばれている2種類の地震波の発見や、精度の高い地震計の開発など、後の地震学の基礎となる成果が、お雇い外国人として来日した人々によってもたらされました。

明治8（1875）年には、気象庁の前身である内務省地理寮測地課気象掛（通称：東京気象台）が設置され、明治20（1887）年に中央気象台と改名されました。この頃から、全国の測候所に地震計を置いて継続的に観測し、地震の調査研究に役立てる方針がとられるようになりました。全国に広がった地震観測網は、わが国の地震研究に大きく寄与しました。

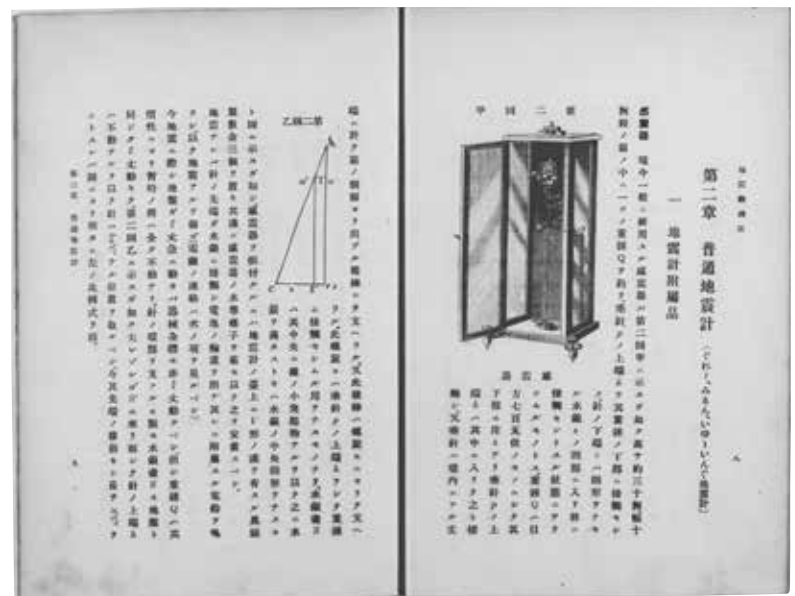
同じ頃、イギリスに帰国したミルンによって、世界規模でも地震観測データの収集・解析を行うネットワークが形成されるようになり、1918年の国際地震センター（International Seismological Summary）設立への布石となりました。



『日本地震学会規則 附・会員姓名宿所 明治19年6月』

日本地震学会 [明治19]
設立から6年目の会員名簿。多くの日本在住外国人が名前を連ねていることがわかります。

インターネット公開
pid/831486/4



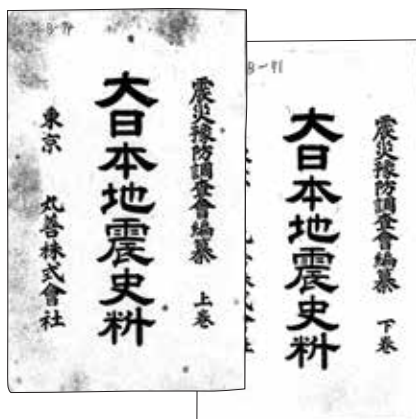
『地震観測法』中央気象台編・刊 大正4

インターネット公開
pid/952305/10

濃尾地震と 震災予防調査会設立

明治24（1891）年10月、濃尾地方で大規模な地震が発生し（濃尾地震、M8.0）、大きな被害をもたらしました。このとき地表に現れた根尾谷断層を調べた小藤文次郎（1856～1935）は、「^{じすべり}地亡」を地震の原因の一つとするオーストリアの地質学者の説を踏まえ、断層原因説の先駆的な論文を発表しました。

一方、濃尾地震の甚大な被害を受け、政府は、日本地震学会のメンバーでもあり、当時帝国大学理科大学学長であった菊池大麓^{だいりく}（1855～1917）の建議に基づいて、明治25（1892）年、震災予防調査会を組織することにしました。かねてより地震学に貢献のあった関谷清景（1855～1896）、小藤、長岡半太郎（1865～1950）、田中館愛橘^{たなかだて あいきつ}（1856～1952）らのほか、建築学の辰野金吾（1854～1919）らも加わり、地震に関する歴史的、統計的調査や建築物の耐震構造の調査研究などに取り組みました。この頃、日本地震学会は、外国人会員の相次ぐ帰国にともない当初の勢いを失いつつあり、震災予防調査会に後を譲るように解散しました。



インターネット公開
pid/993658

インターネット公開
pid/993659

『大日本地震史料』

震災予防調査会編 丸善 1904

允恭天皇5（416）年から慶応元（1865）年に及ぶ、日本の地震や津波に関する古い記録を収集したもの。地震の時間的、地理的分布を知るために戦後も活用されました。昭和期に武者金吉により大増補された、『増訂大日本地震史料』第一巻～第三巻もインターネット公開しています（下写真）。



インターネット公開
pid/1070653

インターネット公開
pid/1070654

インターネット公開
pid/1070659



小藤文次郎「濃尾大地震ノ震源」

『東洋学芸雑誌』9巻126号（1892.3） pp.147-158

館内限定
pid/3559084/19



Kotô, B. On the cause of the great earthquake in central Japan, 1891.

The Journal of the College of Science, Imperial University, Japan, vol.15 (1893), pp.295-353

図書館送信資料
pid/1677821/153

東京大震災予告騒ぎ

明治30（1897）年12月、東京帝国大学理科大学教授の若き地震学者、大森房吉（1868～1923）が震災予防調査会の幹事に就任しました。以後、大正12（1923）年の関東大震災に至るまで、大森は地震学の権威として、精力的に研究に取り組みました。国立国会図書館デジタルコレクションでは、『地震学講話』等の大森の著作をインターネット公開しています。

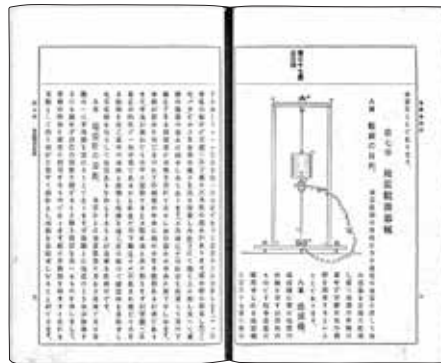
同時期に活躍した今村明恒（1870～1948）は、大森より2歳年下で、濃尾地震に刺激を受けて地震研究を志したといわれています。大森が関東大震災直後に急逝するまで、20年余にわたって助教授の地位にありましたが、地震予知に情熱を注ぎ、地形変動と地震発生の関係の調査・研究など、今日なお評価される業績を残しています。

明治38（1905）年9月、今村は、雑誌『太陽』に「市街地に於る地震の生命及財産に対する損害を軽減する簡法」と題する論稿を発表しました。その中で、江戸時代に千人以上の死者を出した大地震が「平均百年に一回の割合に発生し、而して最後の安政二年以後既に五十年を経過したるのみなれば、尚ほ次の大激震発生には多少の時期を剩すが如しと雖も、然れども慶安二年後五十四年にして、元禄十六年の大激震を発生したる例あれば、災害予防のことは一日も猶予すべきにあらず」と述べ、当時の東京に大地震が起きた場合の被害を予想しました。

この内容が、翌明治39（1906）年1月16日の『東京二六新聞』に「大地震襲来説—東京市大罹災の予言—」と題した記事によってセンセーショナルに報じられ、「丙午の年は火災が多い」という俗説と結びついて世人の不安を煽る結果になりました。大森は、騒ぎを収めるため、その年の3月に「東京と大地

震の浮説」という記事を雑誌『太陽』に発表し、近い将来大地震が東京を襲うという説は、「根拠無き空説」であって「学理上の価値は無きもの」と力説しました。

それから17年後の大正12（1923）年9月1日に関東大震災が起これ、その直後に大森が没しました。大正15（1926）年、今村は『地震の征服』を著し、20年前の自らの東京大震災の被害予測が妥当であったこと、そして地震の予知と震災の予防に対する変わらぬ信念について再度強調しました。『地震の征服』も、国立国会図書館デジタルコレクションでご覧いただけます。



『地震学講話』

大森房吉著 開成館 明治40
大森が著した地震学の入門書です。



インターネット公開
pid/831445/68

「関東震災に就て」 今村明恒 歴史的音源

「大正12年9月1日相模湾に起こった大地震は、関東南部に大震・火災を引き起こし、10万の死者を生じ、55億円の損害を与え、震災の歴史に新しい記録を作ったのでありますが、しかしながら地震としてはありがちの程度に過ぎなかったのであります。」と始まり、防災の重要性を説いています。歴史的音源には、このほか「地震の話」（pid/1319432 ほか）歴史的音源配信提供参加館公開」という今村明恒の講義も収録しています。



歴史的音源（参加館公開）
pid/1319623 ほか

この資料（音源）は、デジタルコレクション内、「歴史的音源」のサービスとして提供されています。当館内と当館の承認を受けた歴史的音源配信提供参加館内でご利用いただけます。

関東大震災の衝撃、 そして「防災」へ

『震災予防調査会報告』第100号（乙）
震災予防調査会編・刊
大正14

インターネット公開
pid/974362/42



関東大震災は、マグニチュード7.9という巨大地震でした。地震発生が正午直前であったため、昼食の準備のために火を用いていた家庭や飲食店などから火災が発生し、死者・行方不明者あわせて約10万5千人という史上空前の被害をもたらしました。犠牲者の9割は火災でなくなったとされています。被害がいかに甚大であったかは、多くの体験記や写真帖から知ることができます。

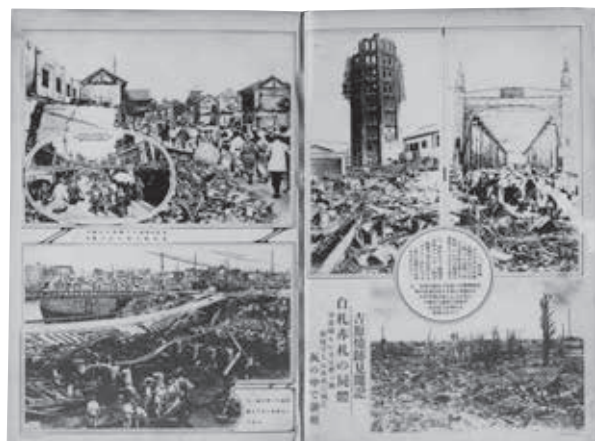
震災予防調査会は、『震災予防調査会報告』第100号として、関東大震災の調査記録を刊行しました。写真や図を多く含み、全5冊で、「地震篇（甲）」・「地変及津浪篇（乙）」・「建築篇（丙）」・「建築物以外ノ工作物篇（丁）」・「火災篇（戊）」から成ります。本号では、これまで重要視されなかった地球物理学的見地に基づいた分析が数多くなされています。

報告書が出された大正14（1925）年に地震研究所が設立され、震災予防調査会は発展的解消を遂げます。最後の刊行物といえるこの資料は、会のそれまでの活動成果を集大成したといってもよいものとなりました。



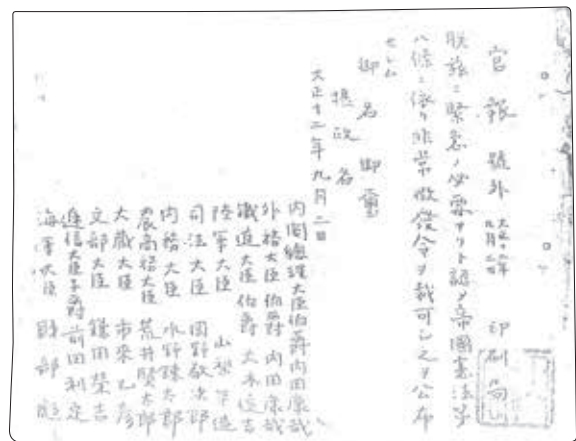
『子供の震災記』
初等教育研究会編 目黒書店
大正13
震災当時、東京高等師範学校附属小学校に通っていた児童たちの震災記です。

図書館送信資料
pid/1702599



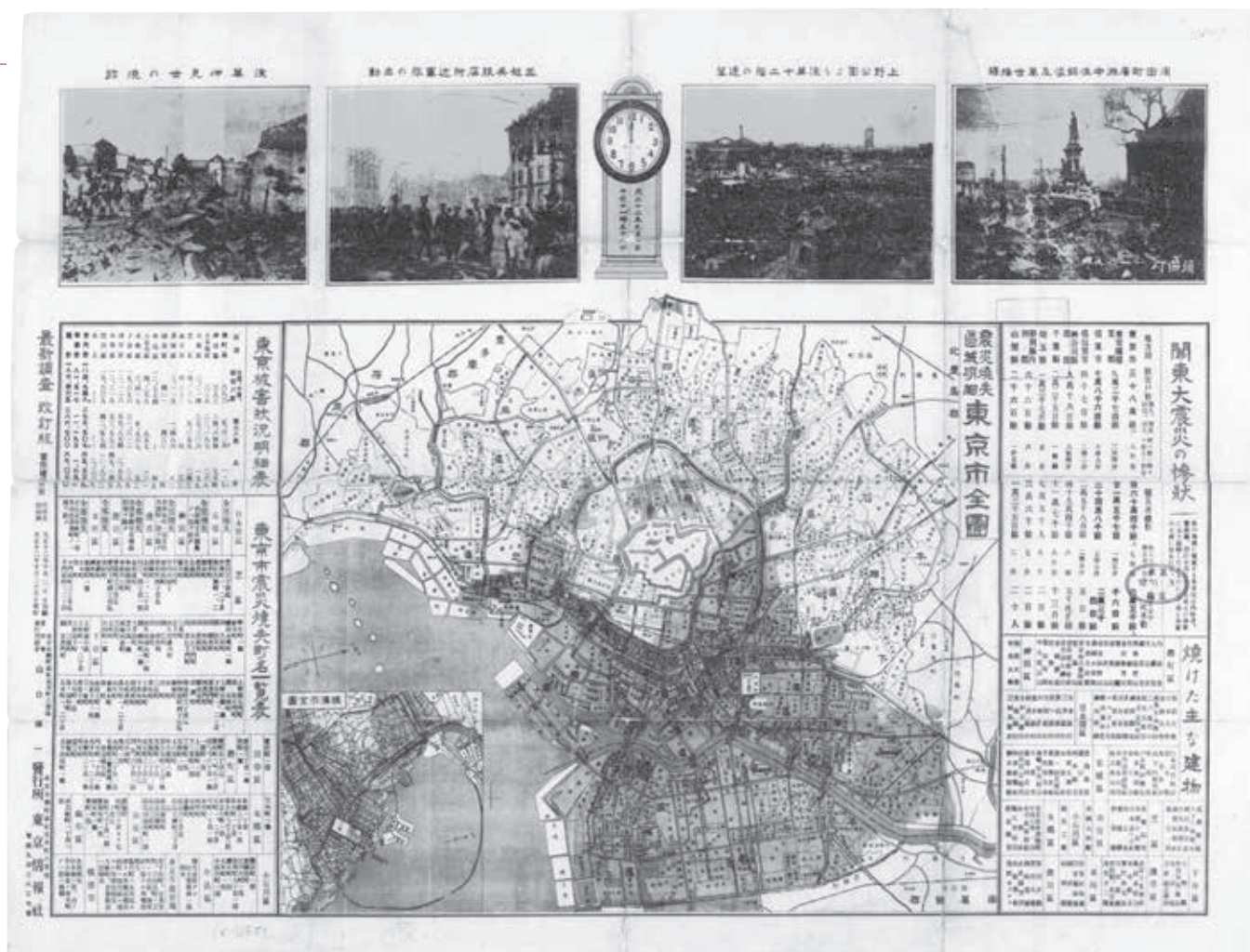
『関東大震災画報 写真時報』写真時報社編・刊 大正12
関東大震災で半壊した浅草凌雲閣や焼け野原となった吉原の様子がわかります。

インターネット公開
pid/987149/8



『官報』1923年9月2日 大蔵省印刷局[編] 大正12
関東大震災により印刷局の設備が全壊したため、震災翌日の9月2日付官報号外は、2日に手書きの謄写版（ガリ版）が数十部刊行され、3日に活字版が追加刊行されました。

インターネット公開
pid/2955451



また、大正9（1920）年に施行された市街地建築物法は、震災後、その施行関連法規が大きく改正されました。建築学者佐野利器（1880～1956）提唱の設計震度が採用され、施行規則に耐震規定が盛り込まれました。耐震規定が法令に現れるのはこれが初めてです。

今村明恒は、震災の後、人の力の及ばない自然現象である「地震」と人的努力で防止できる「震災」を区別し、震災防止策を展開しました。幅広い研究分野で活躍した寺田寅彦（1878～1935）も災害防止には強い関心を抱いており、震災に限らず様々な災害について言及しています。「防災」という言葉は寺田によって創られたとされています。

（利用者サービス部人文課 中村淳一、
電子情報部システム基盤課 奥田倫子、
国際子ども図書館資料情報課 藤井朋子）

『震災焼失区域明細東京市全図』 東京情報社製・刊 大正12

インターネット公開
pid/981827

リサーチ・ナビ「関東大震災の被災状況がわかる地図」では、関東大震災の被災状況がわかる地図を多数紹介しています。インターネットから閲覧できるデジタル化資料も7点紹介しています。
http://rnavi.ndl.go.jp/research_guide/entry/post-722.php



『改正市街地建築物法解説』 星藤治編 鈴木書店 大正13

インターネット公開
pid/931848

○主要参考文献

藤井陽一郎『日本の地震学 その歴史的展望と課題』紀伊国屋書店 1967
萩原尊礼『地震学百年』東京大学出版会 1982
北原糸子・松浦律子・木村玲欧編『日本歴史災害事典』吉川弘文館 2012
宇佐美龍夫・石井寿・今村隆正・武村雅之・松浦律子『日本被害地震総覧 599-2012』東京大学出版会 2013

震災を記録する

国立国会図書館東日本大震災アーカイブ（愛称：ひなぎく）



<http://kn.ndl.go.jp/>

甚大な被害をもたらした東日本大震災からの復興にあたり、地震・津波災害、原子力災害の記録・教訓について、「誰もがアクセス可能な一元的に保存・活用できる仕組みを構築し、広く国内外に情報を発信する」¹ことは、国としての基本方針の一つでした。この方針を実現するため、国立国会図書館はデジタルアーカイブの技術を活用し、平成25年3月7日に「国立国会図書館東日本大震災アーカイブ」（愛称：ひなぎく）を公開しました。「ひなぎく」という愛称は、花言葉「未来」「希望」「あなたと同じ気持ちです」に復興への思いを込めています。

「ひなぎく」は、東日本大震災関連デジタルアーカイブ、データベースを一括検索するためのポータル



ルサイトです。平成27年12月末現在、40機関45のデータベースと連携しており、合計約318万件のデータをまとめて検索することができます。神戸大学附属図書館の「震災文庫」のような東日本大震災以前に発生した大規模地震・津波災害に関するアーカイブとも連携しています。連携機関は年々増加し、平成27年度には、「久慈・野田・普代震災アーカイブ」（岩手県久慈市・野田村・普代村）、「浦安震災アーカイブ」（千葉県浦安市）、「東日本大震災アーカイブ宮城」（宮城県および県内市町村）などとの連携を新規追加しました。

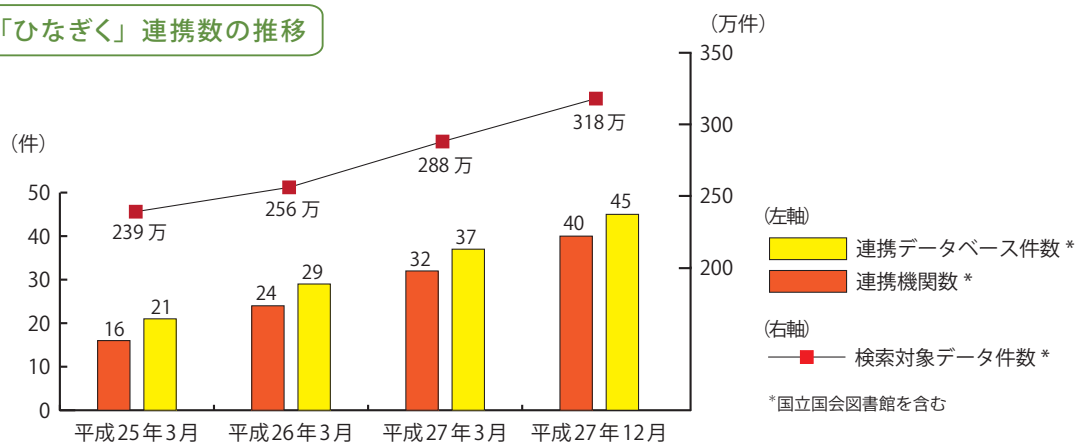
また、「ひなぎく」は電子書庫の機能も備えており、写真データやPDFの文書等、震災関係のデジタル資料そのものを保存することもできます。これまでに、様々な機関の協力により約3万点のデジタル資料を収集、保存しています。その中には、発災後の国会審議動画、被災地を撮影した空中写真、被災地支援・復興事業関連の動画等も含まれています。

正式公開から3年間で連携データベースが21から45に増加し、「ひなぎく」は東日本大震災アーカイブのポータル（入口）としての機能を充実させてきましたが、「ひなぎく」関連の事業は、システム上

「ひなぎく」の機能



「ひなぎく」連携数の推移



の連携推進ではありません。ボランティア団体や自治体等の関係者を対象に、東日本大震災に関する書類等の資料を整理・保存する方法についての講習会を開催し、関連資料の保存促進に努めています。また、連携アーカイブの一つである「みちのく震録伝」を運営する東北大学災害科学国際研究所との共催で、東日本大震災アーカイブシンポジウムを開催しています。さらに、平成27年3月に仙台市で開催された「第3回国連防災世界会議」ではパブリック・フォーラム（展示会・ポスター展示）に参加し、世界各地から集まった防災関係者に向けた情報発信を行うなど、利活用を進めるための広報にも取り組んでいます。

東日本大震災は、地震・津波・原子力発電所事故

が同時におこった複合災害であり、関連するデジタルアーカイブ、データベースは、国、自治体、大学、企業、各種法人等多様な機関により構築されています。分散して保存されているそれらの情報を一括で検索可能とすることで、国全体としての「東日本大震災アーカイブ」を構築するのが「ひなぎく」の目的です。今後も連携アーカイブを増やし、資料を収集・保存しながら、震災の記録が未来にわたり活用されることを目指します。

（電子情報部電子情報流通課）

- 1 「東日本大震災からの復興の基本方針」（平成23年7月29日決定・平成23年8月11日改定 東日本大震災復興対策本部）



東日本大震災に関する書類・写真・動画の整理・保存講習会



国連防災世界会議パブリック・フォーラムの出展ブース

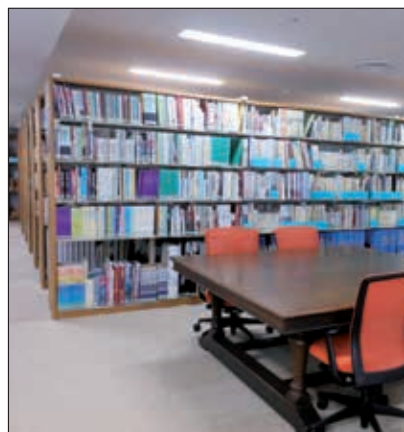
震災を記録する

阪神・淡路大震災における神戸大学附属図書館「震災文庫」の取り組みを中心に

帝塚山大学非常勤講師／元神戸大学附属図書館情報管理課長

稲葉 洋子

神戸大学附属図書館「震災文庫」
<http://www.lib.kobe-u.ac.jp/eqb/>



1. はじめに

阪神・淡路大震災から丸21年、神戸大学附属図書館（以下「神大図書館」）に設立した阪神・淡路大震災関係資料文庫「震災文庫」も今春、丸21年を迎える。「震災文庫」を設立・維持していくに当たり、様々な取り組みを行ってきたが、その取り組みを見直してみたい。

平成7年1月17日早朝に阪神間を襲った直下型地震は、「大地震なんて起こるはずがない」と思いこんでいた阪神間の住民に大きな衝撃と多大な被害を与えた。しかし、そこからの復興の中で新たな市民活動が起こり、平成7年は「ボランティア元年」と呼ばれるようになった。また、インターネットや携帯電話が一般に普及し出したのもこの時期であった。このボランティアとインターネットは、震災後の資料の製作、配布、収集、公開等に影響を及ぼし、図書館の世界にも大きな変化をもたらすこととなった。

2. 阪神・淡路大震災関係資料収集の取り組み

1) 震災資料収集の取り組み

神大図書館が震災資料の収集を決断したのが4月中旬。学外から震災に関する資料を網羅的に見られる所はないかとの問い合わせをいただいたことにより、上司が収集を決断し、図書の選書や発注に携わっていた筆者がこの業務を引き受けた。当時は、通常業務の延長線上のことと簡単に考えていたが、やり始めると、それまで経験したことがない業務の連続であった。

一方、地震翌日から神戸に入りボランティア活動をマネジメントしていた「阪神大震災地元NGO救援連絡会議」（以下「NGO」）では、4月に入り新学期を迎え、学生を中心としたボランティアグループの撤退が相次ぐ中、彼らの活動記録を残すため資料収集を開始していた。さらに、NGOの呼びかけにより、阪神間の公共図書館職員有志が代表となり「震

災記録を残すライブラリアン・ネットワーク」が4月下旬に発足した。そのキャッチフレーズが「忘れてはならない、大震災の記録を後世に伝えよう」である。

2) 震災資料の特徴

「震災文庫」では、当初、市販図書を収集していたが、5月に入っても、出版はそれほど多くない。何より、報道等を通じて市販図書だけでは震災のことは何も掴めないということに気付いた時に、震災資料の収集の難しさを初めて実感した。この気付きが従来の図書館の資料収集を超え、チラシ等一枚もの資料をも含む網羅的収集につながっていく。

テレビや新聞で報道されるボランティアの活動を見ると、そこから様々な資料が見えてくる。彼らが配布している資料はどこで入手できるのだろうか。そのことを考えた時、震災資料は選書・発注して入手するものとは全く異質の資料であり、入手ルートは自分で開拓する必要があることに気付いた。そのルートの一つが市民への寄贈呼びかけである。

3) 収集のための広報と連携

大学図書館が震災資料を収集しているということをもどのような方法で市民に広報するのか。最近でこそ図書館の広報の重要性が言われるが、当時、大学図書館は市民との接点が極めて少ない機関であった。そのような中、地方紙への広報記事の掲載依頼、そして記者クラブへの発信を手探りで開始した。

また、ボランティアが作成・配布している資料はどこで入手可能なのか。ボランティアの住所も不明、何が作成されたのかも不明という状態を考え、

NGOとの連携を開始した。この連携事業の一つが、震災6ヶ月目の7月に開催した「震災記録実務研修会」（阪神大震災地元NGO救援連絡会議文化情報部、震災記録を残すライブラリアン・ネットワークと神戸大学附属図書館の3機関が主催）である。1県17市1町の図書館関係者等が一同に会し、情報交換を行ったが、その後、この研修会は平成11年末まで開催され、貴重な情報共有の場となった。

4) インターネット発信

しかし、収集はなかなかはかどらない。次に何ができるのか考えた時に浮かんだことが、インターネットによる情報発信である。大学もホームページを未開設だったが、同僚の助けを借りて「震災文庫」のホームページを開設した。当時、インターネットを使用している人はそれほど多いとは思っていなかったが、広報の一つの手段として捉えていた。特に震災資料がどのような資料なのか市民に分かっていただくことが難しかったので、集めた資料の情報をリストにしてホームページで発信すれば、イメージしやすくなると思った。平成7年7月上旬、300点のリストを公開した。検索機能もなかったが、このリスト公開こそ、図書館だからできる活動の一つではないかと考えた。リスト化をする際にいちばん困ったことが、一枚もの資料の書誌作成である。図書の目録作成と異なり、チラシやポスターの書誌作成は初体験だった。

網羅的収集を謳うということは、収集した全ての資料についてその公開から保存の過程において、資料に責任を負うことだと再認識した。

平成7年10月30日、神大図書館の「震災文庫」

一般公開に伴い、ホームページ上で資料の検索も可能にした。検索が可能になると、次はたった一枚の資料を閲覧するために神大図書館に来ていただくことに疑問がわいてきた。この不便さを何とか解決できないものか。

5) 資料のデジタル化

書誌情報と同時に現物の画像がインターネットで発信できないだろうか。まず著作権処理が不要な神大図書館被災写真のデジタル化に取り組んだ。全ての写真にキャプションを付したが、後にキャプションも検索可能となり、また英語のキャプションも付したことで、海外への発信にもつながっていく。

次に取り組んだのが、一枚ものの資料のデジタル公開である。著作権処理を文書により丁寧に行うことで、作成者や作成団体等に事業の意義を理解してもらい、追加の資料提供に繋いでいった。このデジタル化は一枚ものの資料から図書全文、音声、動画へ拡大している。

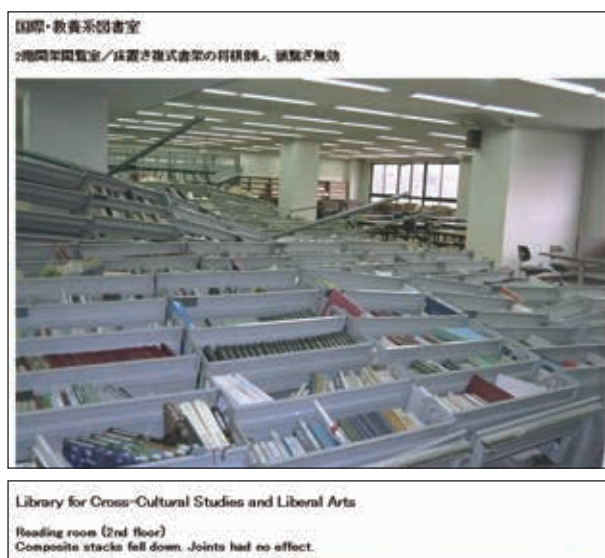
3. 災害大国日本が抱える課題に資料を活かせるのか

1) 災害資料の伝承

未曾有の大災害といわれた震災も、数ヶ月もすると被災地以外の人の脳裏から消え、忘れられていくものである。一方で忘れたと思う被災者も多く、10年、20年経過して初めて資料と向き合う人も多い。1月17日が近づくとメディアが取材に来られるので、「震災文庫」に携わっていた時はこれを広報戦略の一つと考えて、取材に合わせる形で新たな取り組みを用意し、ニュースにさせていただくことで「震災文庫」を思い出してもらおうようにしていた。

東日本大震災が起こった年は、阪神・淡路大震災から16年が経過していたが、東北の多くの図書館職員や研究者が、震災資料収集の重要性を意識し、「震災文庫」を見学に来館された。それは、「震災文庫」が一過性のコレクション構築に留まらず、新たな取り組みを常に続けながら継続して活動していたことも影響していると考える。

しかし、震災資料の収集・公開を続けていくこと



デジタル化した写真と日英のキャプション。左は一番最初にデジタル化した「神戸大学附属図書館被災状況写真集」

一枚ものの資料のメタデータとデジタルデータ



は、図書館組織の中でも大変である。神大図書館においても、震災当時在籍し、神大図書館の被災状況や、避難所としての大学の状況を知っている職員はほとんど退職している。また、管理職は数年で異動していく。その中で「震災文庫」の意義を伝え、人員や予算、広報を常に考えていかなければならない。担当者には継続は重責である。

2) 次の災害に備えて資料活用

阪神間には多くの外国人が居住しており、阪神・淡路大震災直後に多言語支援の問題が起きた際、多言語コミュニティ放送の開局や多言語資料の配布が行われた。近年、人手不足に悩み海外から労働力を求める動きが政府や企業において活発である。将来の災害時の多言語支援はますます重要となってくるだろう。

また、阪神・淡路大震災時と現在との大きな違いは高齢者の著しい増加であり、高齢者を含め障害を

持つ方々への支援は大きな課題である。

震災の有無にかかわらず、災害研究は長期にわたり継続される。だからこそ、震災資料を収集・公開している機関は、災害研究を行う大学や研究機関に資料を積極的に利用してもらい、そこから生まれた成果をまた資料として受け入れる、循環型の利活用を促進することが重要である。

また、震災資料を保管するだけではなく、次世代に引き継ぐためにも、授業にイベントに、日頃より活用について支援できる体制を整えていく必要もある。そして、私たちは震災資料を阪神・淡路大震災の単なる記録として伝えるのではなく、次に起こる災害に備える記憶として常に活かせるように、継承していくことが必要である。

画像提供：神戸大学附属図書館「震災文庫」

東日本大震災アーカイブ宮城の取り組み

宮城県図書館 資料奉仕部 震災文庫整備チーム

田中 亮

東日本大震災アーカイブ宮城
～未来へ伝える記憶と記録～

<https://kioku.library.pref.miyagi.jp/>



宮城県図書館（以下「当館」）は、宮城県内全ての自治体と連携・協力して、東日本大震災に関する記録物を収集・整理してデジタル化し、検索・活用できるアーカイブサイト「東日本大震災アーカイブ宮城（以下「アーカイブ宮城」）」を、平成27年6月から公開している。

東日本大震災に関するデジタルアーカイブは、日本国内だけでなく海外にも存在し、それぞれに特色を持った多彩なデジタルコンテンツを公開して、未曾有の大災害の経験とそこから学び得た教訓を発信して広範に知らせるとともに、後世に記憶を永く伝える試みを始めている。

アーカイブ宮城はその中にあって、ひとつの県の全ての自治体が連携・協力して構築した点では、これまでに例がないアーカイブである。東日本大震災に関して、宮城県全域を網羅する記録物を有してい

る。津波等の被害に遭った沿岸部だけでなく、内陸部でのさまざまな被害の実態、県内各地での復旧・復興の記録を見聞することができる。

本稿では、当館が主体となり県内全ての自治体と連携・協力してデジタルアーカイブを構築・運用するに至るまでの経過、そして公開したアーカイブ宮城の特色や今後の利活用への課題を簡単ではあるが紹介したい。

平成25年度に総務省が「被災地域情報化推進事業（情報通信技術利活用事業費補助金）」のうち、「被災地域記録デジタル化推進事業」（以下「事業」）の募集を行った。当館では、所蔵する記録物を使用し、デジタルアーカイブ構築を検討していたところ、総務省東北総合通信局より、県庁内や県内市町村にも働きかけて、県全体でのアーカイブ構築を勧められた。このため県庁各課室に対して震災関連記

録物の有無および数量に関するアンケートと、県内市町村への意識調査等を実施した。

市町村の意識調査の結果をもとに、当館では、県と市町村が連携して記録物の選定・収集をし、後世に震災の教訓を遺し、活かしていく必要性を何度も市町村に説明し、県内市町村 35 自治体のうち 33 自治体が、県との連携事業を実施することを決定した。また 2 自治体は事業への協力に応じることで了解した。これにより県が主体となって 34 万件の記録物収集および県と 33 市町村との連携による事業として総務省に申請したところ、事業費 6 億 4500 万円として平成 25 年度末に採択された。実質的な事業開始は平成 26 年度からとなったため、それまでに記録物のデジタル化、権利許諾、システム構築を委託する業者選定を行った。

平成 26 年度からは、県庁各課室および連携市町村担当者に記録物の選定・収集や進捗状況についての各種説明会、県地方機関、公立学校、県社会福祉協議会や日本赤十字社宮城県本部等への事業説明と記録物提供依頼を行った。当館だけでなく県震災復興・企画部情報政策課、県教育庁生涯学習課の協力も得て、関係機関との連絡・調整を行った。その結果、県庁内や連携市町村等から、想定した数を大幅に上回る約 41 万件の記録物が提供された。同時に権利許諾処理やシステム構築についても併せて行った。本来ならば平成 26 年度末に公開を予定したが、各種調整に時間を要したために年度内公開に至らなかった。しかし公開時には、権利許諾が得られた記録物から順次約 31 万件を公開した。

アーカイブ宮城に掲載している記録物の特徴は、自治体が収集、作成・撮影した記録物が多いことで

ある。被害や復旧・復興過程の写真だけでなく、住民に対して提供した情報を記載したチラシやパンフレット等も多数掲載している点では、自治体単位で住民に対しての情報提供の方法やその種類等を知ることができるものとする。また、権利許諾を得られた記録物は、当館や市町村が提示した利用規約に同意すれば、だれもがダウンロードして使用することが可能である。デジタルアーカイブの構築を検討した当初から、記録物を見聞するだけではなく、積極的な利活用につながるようと考え、記録物のダウンロードを可能にするシステム構築と、権利許諾の事務処理を行った。

アーカイブ宮城では、キーワード、資料種別、記録物を登録した自治体の検索だけではなく、地図上の検索も可能である。例えば地名や市町村名がわからなくても、地図を使ってエリアを指定して検索すると、そのエリアに関する記録物の検索結果が得られる。

多様な種類の記録物を掲載したアーカイブ宮城を、どのように活用してもらえるかが今後の課題である。当初から想定していたのは防災・減災教育での教材としての利活用である。防災・減災を恒常的に意識するためには、災害に対する知識と未然に防ぐ方法を考えるための情報の提供が必要であると考え。また、今後想定される大規模地震や津波等に対して、どのようなことを事前に検討すべきか、知るための情報としても役立てていただきたい。そのためにも、当館はアーカイブ宮城を積極的に発信し、被災県として自らの経験と教訓を多くの方々に利活用してもらえるよう努める次第である。

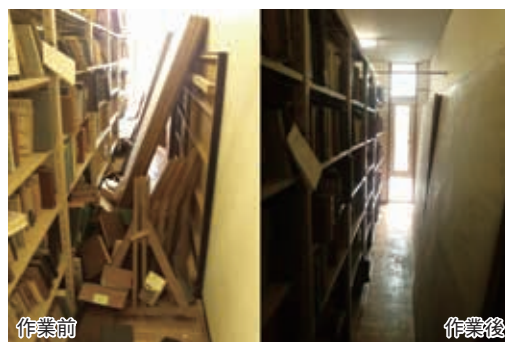
再び動き出すために記録する

湿気とカビの臭いが立ち込める室内。柱に目を向けると基礎部分が壊れ、崩れかけている。書架から本は落ちたまま、時間が止まったかのような書庫。東日本大震災で被災した、ある図書館で見た光景です。

私は、平成26年4月に人事交流の一環で国立国会図書館から宮城県図書館に派遣され、「企画管理部企画協力班 兼 資料奉仕部震災文庫整備チーム」という少し長い肩書を拝命しました。県立図書館の職員として関わってきた仕事をご紹介します。

宮城県図書館は、平成26年度に県内の35市町村と連携・協力し「東日本大震災アーカイブ宮城」を構築しました（p.18参照）。震災文庫整備チームでは、資料収集とシステム開発を並行して実施しました。一口に「震災資料を収集する」と言っても、実際にはそう簡単ではありません。写真、文書、音声、動画等、震災を後世に伝えるためのあらゆる記録が震災資料に含まれますが、それらを持っている方々は、それらが保存される対象だとは意識しないものです。加えて、復興事業でどの部局も多忙を極めるなかで、行政各所から資料を提供していただくことのハードルは非常に高いものでした。各地で説明会を開いたり、直接訪問してお願いしたりといったアナログな活動の積み重ねによって、約41万点の資料を集めることができました。

企画協力班は、図書館協力事業、広報・展示



企画、館内システム管理等を担当します。なかでも印象深いのが、県内の被災図書館に対する支援でした。

県立図書館による市町村支援には「中間支援」があります。これは、市町村図書館とボランティアを繋ぐ役割を担うものです。ボランティアの受入れ調整は、想像以上に現場職員の負担になるものです。そのため県図書館が窓口となり、現場のニーズと支援の調整を行うことで、間接的に支援をすることができます。私は、被災図書館への支援で、現地に泊まりこみでボランティアを統括して作業手順を確立しながら復旧作業を行いました。このとき、震災後立入禁止となっていた書庫に入れていただき、目の当たりにしたのが冒頭の光景です。

たとえ少しずつでも前へ進んでいることが実感できれば、未来への希望と自信を持つことができます。復旧・復興の道のりを記録することは、絶望から再び立ち上がるための希望を集めることだと思うのです。

（実務研修員 本の子 ホンぼーや）

本屋にない本

国立国会図書館は、法律によって定められた納本制度により、日本国内の出版物を広く収集しています。
このコーナーでは、主として取次店を通さない国内出版物を取り上げて、ご紹介します。

忘れない、明日のために。

復興へのメッセージ

新潟県中越大震災復興10年記録集

長岡市地域振興戦略部 編・刊

2015.3 69p 30cm

<請求記号 EG77-L1120>

本書は、新潟県中越大震災後、10年にわたる長岡市の復興の歩みをまとめた記録集である。

新潟県のほぼ中央に位置する長岡市は、震災後の平成17年4月から平成22年3月までの間に、甚大な被害を受けた山古志村や震央のあった川口町を含む、1市7町2村と段階的に合併した。

本書は、震災からの10年間をおおよそ3年ごとに分けた復旧期、再生期、発展期の復興活動を記した1～3章と、次の10年間の地域づくりの方向性を示した最終章の4章から構成され、随所に市民27名のインタビューがちりばめられている。巻頭に長岡市被災地マップ、新潟県中越大震災の概要、長岡市復興計画、復旧・復興年表がある。

新潟県中越地震の特徴は、日本の国土の約7割を占めるといわれる中山間地域を襲った地盤災害であるとされる。平成16年10月23日17時56分頃発生した新潟県中越地震は、平成7年の兵庫県南部地震（阪神・淡路大震災）以来の震度7を記録した。7月の福島・新潟豪雨や台風がもたらした降雨によって地盤がゆるんでいたこともあり、各地で土砂災害が相次いだ。

また、余震が長引くとともに、豪雪地帯である被災地に冬が迫ってきていたことから二次災害、複合災害が懸念され、多数の避難者が出た。被害が大きかった山古志村（当時）は、翌年4月に合併予定であった長岡市へ全村避難した。長い避難生活は中山

間地域から市街地への移住を促すこととなった。結果として、震災は中山間地域の過疎や高齢化を急速に進めてしまった。そのため、市の復興計画でも中山間地域の持続性の確保や地域社会の活性化が、事業の柱に位置づけられている。

復興活動の特徴として注目されるのは、集落が活動単位として重要な役割を果たしていることである。旧山古志村民は当初、集落入り乱れて避難所入りしたが、仮設住宅には集落単位で入居した。また、集落単位で移転する「防災集団移転促進事業」や複数集落の合同開催による盆踊り等の集落行事の存続など、集落というコミュニティがさまざまな復興事業において核となり、災害で傷ついた人々の心の拠り所となっていたことがうかがえる。集落を単位とした活動は、集落内の世代間コミュニケーションの活発化にもつながったという。

一方、住民同士のつながりだけでなく、外部との交流の重要性も本書は示唆している。ボランティア、都市部の大学生のインターン、復興基金で設置された地域復興支援員といった地域外の人々との交流が地域づくりの大きな活力となっている。

本書は災害からの復興の記録であると同時に、過疎と高齢化が進む農山村地域をいかに存続し、活性化させていくかのチャレンジの記録となっている。

（収集書誌部逐次刊行物・特別資料課 石澤 文）



※入手に関するお問い合わせ先
長岡市地域振興戦略部 電話02558(339)2515
長岡市ホームページで全文をPDFで公開中。
<http://www.city.nagaoka.niigata.jp/shisei/care01/sinsai/krokusyu.html>



長谷川武次郎のちりめん本 *The Smiling Book*の下絵をめぐって 大塚 奈奈絵

本誌644(2014年11月)号の「今月の一冊」(pp.2-3)で紹介したように、エミール・ヴェルハーレン (Emile Verhaeren) のフランス語の詩画集 *Images Japonaises* には、同じ挿絵でありながら、タイトルと本文の異なる2冊の英語版詩画集、ちりめん本 *The Smiling Book* と平紙本 *Glimpses of Japan* が存在することが知られています。^{1,2,3}

国立国会図書館では、長谷川武次郎が出版したこれら3冊を所蔵しています。この3冊は、その成立過程や、出版の前後関係など、不明な点が多くあります。

一方、長谷川武次郎の孫に当たる西宮雄作氏は、*The Smiling Book* の下絵を所蔵しておられ、その下絵によって今まで不明であった点が少なからずわかってきました。また、長谷川武次郎のちりめん本については、様々な角度で研究がなされていますが、下絵が紹介されたことはなく、明治期の多色刷木版挿絵本の製作過程を知るためにも、この下絵の存在は大変意義深いと考えられます。

そこで本稿では、下絵の内容を紹介し、当館が所蔵する *The Smiling Book*、そしてこれまでに存在を確認することができた *The Smiling Book* の異版と比較検討します。

1. 西宮雄作氏所蔵の *The Smiling Book* の下絵について

まず最初に、西宮氏の所蔵する *The Smiling Book* の下絵についてご説明しましょう。この下絵は、ごく薄い和紙16枚を袋とじにして、こよりで綴じたもので、表紙と奥付のある見開き部分、裏表紙以外には、1～26まで一連の頁番号がふられています。

絵は朱と黒で描かれ、同様に朱と黒で色の指定や文章が書き込まれています。本文の英語には、推敲の跡やスペルミスを訂正した箇所なども残っています。ここではテキスト部分を中心に内容を簡単にご紹介しましょう。

The Smiling Book の下絵の表紙



西宮雄作氏所蔵 *The Smiling Book* の下絵

表紙 表紙の下絵には、黒字でタイトルを消した跡があり、おそらく最初は *Japanese Smiling*、次に *Japanese Smiles* としようと考えたものの、最終的に *The Smiling Book* としたものと思われます。左下に "Published by T. Hasegawa, Tokyo, Japan" と記入されています。blue や green のように英語で色の指定がされています。

pp.1-2 ページをあけると、藤や桜の花に囲まれた枠があり、"In appreciation of the Beautiful Habit of Smiling this Volume is affectionably dedicated. By Lu Wheat Frank Hastings, Sole Agent, Yokohama, Japan." と書き込まれています。p.2には寺と五重塔の絵でここにも文字を入れる枠がありますが、この部分は空白です。当館の所蔵する *The Smiling Book* にはp.1の枠と文字はなく、p.2の枠のみが空白で残っていますので、構図の関係で枠を一つにしたのかもしれませんが。Lu Wheat はアメリカの作家で、*The Smiling Book* というタイトルがLu Wheatの言葉に由来すること、さらに企画した際には、横浜のFrank Hastingsから販売される予定であったことが分かります。

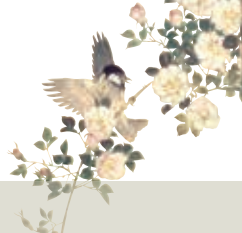
pp.3-4 蓮の池の向こうに寺が見える構図に、「蓮葉の濁りに染まぬころもてなにとて露をたまとあさむく」という『古今和歌集』（古今集）の僧正遍昭の和歌とその英訳が書かれています。

*Rooted on shine slime and mud, yet all unsoiled
the Lotus rears its perfect head
and on its leaf the dew drop
shines like jewel Gems unspoiled.*

英訳には訂正の痕があり、また、当館所蔵版の本文とも異なっています。英訳の前半は、秋山愛三郎が1894年に出版したちりめん本 *Rokkasen : the illustrated poems by the six poetical geniuses* に掲載された翻訳の前半部分によく似ています。

pp.5-6 p.5には昼の空でミズを奪い合う小鳥達を背景に
*One little bug for twenty birds
But this was the hour of noon*
とあり、p.6には、虫の絵に、
*When it was dark
There were plenty bugs
But the little birds had all gone*
という詩句が添えられています。出典は不明です。隅に「後藤」という書き込みがあります。





pp.7-8 p.8に2つの枠があり、ロバート・バーンズ (Robert Burns) の "Lament. written when the poet was about to leave Scotland" の一節⁴ではないかと思われる詩句が書かれています。

*Ye foam crested billow allow me to wail
No more on your soft yellow sands shall we wonder
Nor smile at the moon's silvery glow on the sail
For now our brief love has been riven asunder.*

*No more shall the soft thrill of love warm my breast
I haste with the storm to a far distant shore
Where unknown unlamented my ashes shall rest
And joy shall revisit my bosom no more*

色の指定のほか、上の隅に「後藤」という書き込みがあります。

pp.9-10 p.9には林が描かれ、p.10には枝にとまる鳥が描かれています。文字はありませんが、中心部に文字を入れるための罫線が入っています。上の隅に「後藤」という書き込みがあります。

pp.11-12 水辺で少女が男の子を後ろから抱きかかえている絵で、中心部分に文字用の罫線があり、以下のような内容の、*The Peterson magazine* の vol.106 (1895年) の切り抜きがピタで留めてあります。

*"CHERRY-BLOSSOM," lithe and little, almond eyes and dusky hair,
In her garden waits and listens. She's a musmée, sweet and fair!
Safe at anchor, in the harbor, rides the ship from northern shores,
While the small-boat hastens gladly, with a lover at the oars.*

"musmée"という単語や詩の内容から、ビエール・ロチの小説等が連想されますが、Helen Leavenworth Herrickの "CHERRY-BLOSSOM" の一節⁵です。p.11に赤字で「華邨」、p.12に黒字で「横田」の書き込みがあります。

pp.13-14 p.13、p.14は美しい花に鳥がとまったり、花のまわりを蜂がとんでいる絵で、p.14に *The Peterson magazine* の vol.106 (1895年) に掲載された "The Bird-Song" の一節⁶の切り抜

きが貼ってあります。

*Fly hither, honey-laden bee!
A sweeter sweet I'll show to thee;
The happy secret throbs and thrills,
And every lonely place it fills
With joyous life and ecstasy —
I love my love!* Julia Taft Bayne.

p.14に黒字で「横田」の書き込みがあります。

pp.15-16 海に船が浮かんでいる光景で、p.16には、ロングフェロー (Henry Wadsworth Longfellow) の "Hymn To The Night" の詩句を手書きした紙が貼ってあります。

*Peace! Peace! Orestes-like I breathe this prayer!
Descend with broad-winged flight,
The welcome, the thrice-prayed for, the most fair,
The best-beloved Night!*

p.16の上部隅に「後藤」の書き込みがあります。

pp.17-18 p.17には柱に花の入った籠と扇がかけてあり、p.18には丸窓の向こうに富士山が見える光景が広がり、その上部に文字を書くための罫線が入っています。「横田」の書き込みがあります。

pp.19-20 p.19は画面を斜めに三角に区切り、線上には小鳥がとまっています。上部には古今集の「きのふまで早苗とりしかいつのまに稲葉そよぎて秋風の吹く」という和歌が書き込まれています。下部には Henry Howard, Earl of Surrey のソネット "Description of the Spring" からと思われる、以下のような切り抜きが貼ってあります。

*"The sweet season, that bud and bloom forth brings,
With green hath clad the hills and eke the vale;
The nightingale with feathers new she sings;
The turtle to his mate hath told her tale."*

p.20には、花と蝶の絵に黒字で「過春の様若稲ノ内 種々ノ花」、上部隅に「横田」の書き込みがあります。

pp.21-22 p.21に大きな枠があり、Nellie G. Cone の "A Rhyme of the Time" の一節⁷と思われる詩句が書き込まれています。

Miss Palos Endora Von Blurkey

*She didn't know chicken from Turkey
High Spanish and Greek she could speak fluently*

But her knowledge of poultry was murky

p.22にかけて、七面鳥と、ミズを引っ張り合うひよこの絵が描かれ、上部に「後藤」と書き込まれています。

pp.23-24 p.23は斜め線で区切られたスペースに、蜘蛛の巣と蜘蛛、蝸牛、バッタの絵が描かれ、上部にシェークスピアの『マクベス』冒頭の3人の魔女のセリフ "When shall we three meet again" "In thunder lightning or in rain" が白抜きで書き込まれています。p.24はクラゲが浮き、鳥が飛ぶ海の絵で、上部に「横田」の書き込みがあります。

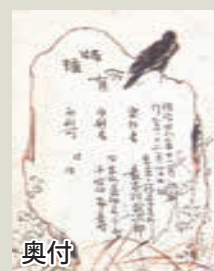
pp.25-26 p.25は千代紙などに見られる花の帯で斜めに画面を区切り、向かって左側には "All the World is a stage and all the men and women are merely players" というシェークスピアの『お気に召すまま』のセリフが書かれています。画面右側にはクワを担いで煙草を吸う男、続くp.26には後姿の僧侶、武士、傘を捧げ持つ女中を供に連れた女性、天秤棒を担いだ魚売りの男が描かれ、上部に朱で「芝居」、黒で「後藤」の書き込みがあります。

奥付左 桜やほかの花々の絵に、朱で「春先萌出る様」という書き込みがあり、シェークスピアの『お気に召すまま』の "And so from hour to hour We ripe and ripe, and then from hour to hour we rot and rot, and thereby hangs a tale." というセリフが書き込まれています。

奥付 「版權所有」の下に以下が書いてあります。

明治廿八年十一月印刷
同年十二月一日出版
発行者 東京々橋區日吉町 長谷川武次郎
印刷者 同本所區押上町百一地 小宮屋壽
印刷所 同 同

後表紙 2本の松の絵





次に、これらの下絵と、当館が所蔵する *The Smiling Book* を比べてみましょう。両者の挿絵の数量・内容はほぼ共通していますので、ここでは、表紙と裏表紙以外の見開き2ページを一つの絵と考え、全体で14点の本文と挿絵があると考えてみます。詩句等が添えられている絵が、当館所蔵版では4点であるのに対して、下絵では12点です。また下絵では、詩句等がない2点にも文字を書き込むための枠や罫線が残っています。詩句等は、手書きで書き込まれたもののほかに、既存の書籍の一部を切り抜いてピンで留めてある箇所や、別の紙に手書きして糊で貼り込んだ箇所もありますから、罫線だけのページも、本文の詩句等が脱落した可能性も考えられます。

つまり、本文のほとんどない木版画集だと思われる *The Smiling Book* は、もともとは日本の古今集等の和歌や欧米の詩句、シェークスピアの劇の台詞等に挿絵を添えた挿絵本として企画された可能性が考えられます。また、華邨（鈴木宗太郎）以外にも「後藤」「横田」という名前が書き込まれていることから、当初は複数の画家に挿絵を依頼する予定であった可能性も考えられます。さらに、最初は明治28(1895)年11～12月に出版し、横浜在住のエージェントが売り出す予定であったことも、この下絵から分かりました。

2. *The Smiling Book* の異版について

前述したように、国立国会図書館所蔵の *The Smiling Book* には、p.3-4、p.5-6、p.23-24、p.25-26 の4か所にのみ本文があり、その内容は西宮氏が所蔵する下絵のものとはほぼ一致します。他方、下絵に本文のあるページが多いことが気になります。

ところで、当館が所蔵する *The Smiling Book* は、旧帝国図書館の旧蔵本であり、内務省から明治29

当館所蔵 *The Smiling Book*





年5月15日に交付されたことを示す「内交」印が押され、表紙には「版權登録」の印があるものの、縦線で消されています。つまり、この1冊は、当時の版權法に従い、内務省に版權の所有を届け出るために納められたものの1冊であると考えられます。



当館所蔵 *The Smiling Book* より

長谷川武次郎の製作した一連の木版多色刷り挿絵本は、挿絵の部分は木版ですが、本文は挿絵を刷った後にさらに活字で印刷したもの、合羽刷りと呼ばれるステンシルのような技法で加えたものなどがあります。あくまで推量ですが、江戸時代の板株（近世、書物の版木を所有する権利。現在の版權にあたる）の意識が残っていた当時の慣習で、版權の登録は木版の部分についてのみであると考えられていたと仮定すると、異なった本文を持ち、出版年が異なると考えられる *Images Japonaises*、*Glimpses of Japan*、また後述する *The Smiling Book* の異版の奥付が全く同じであることが理解できます⁸。さらに、版權登録の手続きのためには、木版以外の印刷方法で後から加える本文を

印刷していない本を納めた場合があったのではないかと考えると、当館が所蔵する *The Smiling Book* の本文の分量がとても少ないことも納得ができます。

もしもこの推測が正しいならば、どこかにこの下絵と同じ詩句等を掲載して売り出された *The Smiling Book* が存在するのではないのでしょうか。そのように考えて図書館等の所蔵を調べましたが、国内では当館以外に *The Smiling Book* を所蔵している機関は見当たりませんでした。そこで、Worldcat⁹で外国の所蔵館を検索したところ、アメリカの4つの大学図書館が Lu Wheat を著者とする *The Smiling Book* を所蔵していることが分かりました。

所蔵館に問い合わせたところ、University of Wisconsin-Milwaukee Libraries (UWM Libraries)、Vassar College Libraries、Florida State University Strozier Library の3館が所蔵するものの表紙・見返し・奥付のページを確認できました。さらに、UWM Libraries 所蔵分については *The Smiling Book* の全冊の内容を確認することができ、この3館が西宮氏が所有する下絵に酷似した *The Smiling Book* を所蔵していることが分かりました。

ただし、これらの本には下絵の見返しにあった "Frank Hastings, Sole Agent, Yokohama, Japan." という記載がなく、また、奥付には「版權所有」の文字の



当館所蔵 *Images Japonaises* と *Glimpses of Japan*



下に以下のように書かれています。

著者 発行者 東京市京橋區日吉町十番地 長谷川武次郎

画者 鈴木宗太郎

印刷者 小宮ヤス

明治廿九年五月一日印刷

同月七日發行

この印刷・発行日は、当館が所蔵する *Images Japonaises*、*Glimpses of Japan* と全く同じ日付です¹⁰。

なお、UWM Libraries所蔵の *The Smiling Book* と下絵を照合したところ、下絵には本文がなかった箇所にも、以下のような詩句が掲載されていました。

pp.9-10

*Whom would your cries, with artful calumny,
Accuse of scatt'ring the pale cherry-flow'rs?
'Tis your own pinions flitting through these bow'rs
That raise the gust which makes them fall and die!*

この詩は、チェンバレン (Basil Hall Chamberlain) 翻訳の *The Classical poetry of the Japanese* (Trübner, 1880) p.119 に掲載されている、古今集春の部の素性法師の和歌「こづたへばおのが羽かぜに散る花を誰におほせてこころ鳴くらむ」の翻訳です。古今集の詞書には「うぐいすのなくをよめる」とあり、鶯ならば花は梅なのですが、翻訳では桜になっています。また、挿絵には花は見られなくて木葉は茶色、鳥も鶯よりも大きな印象を与えます。

pp.17-18

p.18の窓から見える富士山の絵に、以下の詩が活字印刷で添えられています。

*Now hid from sight are great Mount Fusi's fires.
Mount Fusi, said I? — 'Tis myself I mean;
For the word Fusi signifies, I ween,
Few see the constant flame of my desires.*



Special Collections, University of Wisconsin-Milwaukee

p.17の絵には花の陰に隠れた和歌の短冊が見え隠れしていて、その文字と英訳から、古今集の「人知れぬ思ひを常にするがなる富士の山こそ我が身なりけれ」の翻訳であることが分かります。この訳もまた前述の *The Classical poetry of the Japanese* (Trübner, 1880) p.127 に掲載されています。

3. 3つの挿絵本の比較から

今回ご紹介した *The Smiling Book* の下絵と当館所蔵本とは内容の異なる *The Smiling Book* の存在によって、*The Smiling Book* が明治28 (1895) 年には出版が予定されていたこと、おそらくは同じ挿絵と奥付を持つ *Images Japonaises*、*Glimpses of Japan* に先立って刊行されたであろうこと、古今集の和歌の翻訳や英語の詩句、劇の台詞からイメージした「挿絵」を添えた挿絵本として出版されたことが分かりました。

ところで、*The Smiling Book* については、エミール・ヴェルハーレンの研究家である大場恒明が以下のように述べています。

武次郎はヴェルハーレンに詩作を依頼したのが、明治31年 (1898)。その際、すでに出来あがっていた版画、そしてヴェルハーレンの詩節がキャプションとして入ることを予定して、「マド」を空けておいた版画、すなわち、前述のSB (著者注: *The Smiling Book*) に使われている版画をヴェルハーレンに送ったものと推測される。(注1 大場 p.103)



今回判明した事実と、大場の推測を合わせると、エミール・ヴェルハーレンに送られた版画は、元々は挿絵として描かれたものであったのですが、フランス語の詩画集 *Images Japonaises* として出版された際には、元々の絵のテーマとは異なる詩句が挿絵に添えられました。日本の画家がシェークスピアの台詞から連想した挿絵も、文化の異なるヴェルハーレンには、単なる日本の風物と写ったものと思われ、比較文化の観点からはとても興味深いと思われます。

また、一見同じように見える *The Smiling Book*、*Images Japonaises*、*Glimpses of Japan* の挿絵についても、着物の柄、花や景色の細部に異なっている箇所がありました。この3冊の成立にはまだ分からないことが多いのですが、奥付以外の様々な異同を総合して、出版年等を検討することが必要だと思われます。

最後に、*The Smiling Book* の下絵の紹介を許可して下さった西宮雄作様、異版の画像の確認にご協力をいただいたハーバード大学イェンチェン図書館司書の山田久仁子様、UWM Libraries の Lee Wagner 様、Vassar College Libraries の Dean M. Rogers 様、Florida State University Strozier Library の Stuart Rochford 様はじめ多くの皆様に心から感謝いたします。

(おおつか ななえ 総務部司書監)

- 1 大場恒明「エミール・ヴェルハーレンの *Images Japonaises* をめぐって」『神奈川大学国際経営論集』(16/17) 1999.3 pp.85-106 (<http://hdl.handle.net/10487/4073>)
- 2 村松定史「異文化交流のひとつま ヴェルハーレンと縮緬本」『東京成徳大学研究紀要』(8) 2001 pp.41-54 には、*Images japonaises* の全頁の写真、原文および日本語訳が掲載されている。(<http://www.tsu.ac.jp/Portals/0/research/13/P041-054.pdf>)
- 3 Sharf, Frederic A. *Takejiro Hasegawa : Meiji Japan's preeminent publisher of wood-block-illustrated crepe-paper books*. Peabody Essex Museum, 1994. <請求記号 UE17-A4>
- 4 *The poetical works and letters of Robert Burns, with copious marginal explanations of the Scotch words, and life. Four engravings on steel.* Gall & Inglis [1865?] (<http://babel.hathitrust.org/cgi/pt?id=coo.31924013446327;view=1up;seq=220>)
- 5 *The Peterson magazine*. vol.106(1895), p.386 (<http://babel.hathitrust.org/cgi/pt?id=chi.74716295;view=1up;seq=396>)
- 6 同上, p.360 (<http://babel.hathitrust.org/cgi/pt?id=chi.74716295;view=1up;seq=370>)
- 7 *Scribner's Monthly*. vol.18(1879), p.952
- 8 当館所蔵の *The Smiling Book* だけは、奥付の印刷日が5月10日、発行日が同月20日となっています。稀にある例ですが、内務省への届出が、何らかの理由で、当初発行を予定した5月7日に間に合わなくなったため、届出に合わせた奥付となったものと考えられます。
- 9 世界中の10,000以上の図書館の所蔵コレクションが検索できる世界最大の総合目録サイト。(<https://www.worldcat.org/>)
- 10 ヴェルハーレンの研究者の間では、*Images Japonaises* の奥付の日付は明治29(1896)年ですが、実際の刊行は1900年であることがかねてから指摘されていました。なお、大場は、ブリュッセルの王立図書館所蔵の *Images Japonaise* と横浜開港記念館所蔵のそれを比較し、p.19-20の挿絵の違いと表紙の長谷川の住所の違いに注目して、前者を1900年のパリ万博に出品されたもの、後者を長谷川が上根岸に転居した明治44(1911)年以後に印刷・出版されたエディションとしています。



当館所蔵 *The Smiling Book* 奥付

法規の制定

【規則第1号】 国立国会図書館資料利用規則及び国立国会図書館国際子ども図書館資料利用規則の一部を改正する規則

(平成28年1月20日制定)

国立国会図書館資料利用規則(平成16年国立国会図書館規則第5号)において、複写サービスメニューに特定の資料を対象としたデジタルカメラによる撮影手法を追加した。また、国際子ども図書館のリニューアルに伴い、国立国会図書館国際子ども図書館資料利用規則(平成12年国立国会図書館規則第4号)において、閲覧室として平成28年2月に開室する調べものの部屋および児童書ギャラリーを追加した。あわせて所要の規定を整備した。同月1日から施行された。

【告示第1号】 複写料金に関する件の一部を改正する件

(平成28年1月20日制定)

デジタルカメラ撮影等の複写サービスメニューの追加に伴い、撮影による画像を記録した光ディスクおよび当該画像を記録した機械可読資料を複製した光ディスクに係る複写料金を定めるとともに、画像の加工に係る料金の規定を新たに設けた。平成28年2月1日から施行された。

これらの法規による改正後の国立国会図書館資料利用規則、国立国会図書館国際子ども図書館資料利用規則および複写料金に関する件(昭和61年国立国会図書館告示第1号)は、国立国会図書館ホームページ(<http://www.ndl.go.jp/>)>国立国会図書館について>関係法規(<http://www.ndl.go.jp/jp/aboutus/laws/index.html>)に掲載している。

第7回科学技術情報 整備審議会



平成27年12月14日、国立国会図書館東京本館において、第7回科学技術情報整備審議会が開催され、委員・専門委員9名、当館からは館長ほか13名が出席した。

「イノベーションを支える『知識インフラ』の深化のための提言～第四期科学技術情報整備基本計画策定に向けて～（案）」について審議が行われ、全会一致で了承後、安西委員長から館長に提言が手交された。

提言では、国内外の動向や課題等を踏まえた上で、将来にわたって持続的に我が国の知的生産活動を支え、イノベーションを創出するには、多種多様な資料・情報への長期的かつ広範なアクセスと利活用の基盤となる「深化型知識インフラ」の実現が必要であることが述べられている。そのためには、様々なコンテンツを生み出し蓄積する「恒久的保存のための領域」と、コンテンツをより利活用しやすく整備する「利活用促進のための領域」を有効に機能させることが重要であり、保存と利活用の各領域を有機的に繋げる役割を果たすことを当館に求める内容となっている。

館長からは、今回の提言を受けて、国立国会図書館の第四期科学技術情報整備基本計画を策定し、具体的な事項について取り組んでいく旨を報告した。

審議会に関する情報は、国立国会図書館ホームページ（<http://www.ndl.go.jp/>）>国立国会図書館について>審議会・科学技術情報整備審議会（<http://www.ndl.go.jp/jp/aboutus/tech/council/index.html>）に掲載している。

科学技術情報整備審議会委員名簿(五十音順 敬称略)(平成27年12月14日現在)

委員長	安西 祐一郎	日本学術振興会理事長
委員長代理	竹内 比呂也	千葉大学副学長
委員	生川 浩史	文部科学省大臣官房審議官
	喜連川 優	情報・システム研究機構国立情報学研究所長
	倉田 敬子	慶應義塾大学文学部教授
	児玉 敏雄	日本原子力研究開発機構理事長
	佐藤 義則	東北学院大学文学部教授
	戸山 芳昭	国際医学情報センター理事長
	中村 利雄	日本商工会議所顧問
	濱口 道成	科学技術振興機構理事長
	藤垣 裕子	東京大学大学院総合文化研究科副研究科長・教養学部副学部長
専門委員	村山 泰啓	情報通信研究機構統合データシステム研究開発室長



お知らせ

■ 子どものへや・世界を知るへやリニューアルオープン

3月1日に、国際子ども図書館の子どものへやおよび世界を知るへやがリニューアルオープンします。

子どものへやは、おもに小学生までの子どもを対象とした児童書(絵本、読み物、知識の本)が置いてある部屋です。くつを脱いで本を読むことができるスペースを新設しましたので、お子さんにゆったりと読み聞かせをすることができます。

世界を知るへやは、世界の国と地域を知るための本を揃えた部屋です。これまで並んでいた一般向けの本はレンガ棟2階の調べものの部屋に移し、新たに海外の絵本や物語約600冊と、各国語に翻訳された児童書約400冊を加えました。国による表現の違いや、日本語原書との読み比べを楽しむことができます。

※1月から休止していた「子どものためのおはなし会」「ちいさな子どものためのわらべうたと絵本の会」を3月から再開します。開催頻度に変更があります。詳しくは国際子ども図書館ホームページをご覧ください。

おはなし会 <http://www.kodomo.go.jp/use/room/childroom/talk.html>

わらべうたの会 <http://www.kodomo.go.jp/use/room/childroom/song.html>

○問合せ先

国立国会図書館国際子ども図書館 児童サービス課

電話 03 (3827) 2053 (代表)

お知らせ

■ 国際子ども図書館 リニューアル記念展示会 「現実へのまなざし、 夢へのつばさ：現代翻訳 児童文学の半世紀」



国際子ども図書館では、リニューアルを記念して、3月22日から、展示会「現実へのまなざし、夢へのつばさ：現代翻訳児童文学の半世紀」を開催します。

1970年代以降に邦訳された海外児童文学を、その多様性に着目して、次の8つのテーマから紹介します。

- ①子ども像の展開 ②家族像の変容 ③ジャンルの崩壊 ④タブーへの挑戦
- ⑤戦争への視点 ⑥旧作の再解釈 ⑦ファンタジーの隆盛
- ⑧1970年代以降の注目作家

平成12年の国際子ども図書館開館時には、「子どもの本・翻訳の歩み展」を開催し、明治期以降1960年代までの翻訳児童文学を時系列で紹介しました。今回の展示会は、その後続企画となります。

展示資料はおよそ300点です。どうぞご期待ください。

開催期間 3月22日（火）～7月24日（日）

休館日 月曜日、国民の祝日・休日（こどもの日を除く）、第3水曜日
（資料整理休館日）

開催時間 9:30～17:00

会場 国際子ども図書館 レンガ棟3階 本のミュージアム

入場料 無料

<関連行事のご案内>

講演会「翻訳という魔法のメガネー海外児童文学受容の50年」

3月27日（日）14:00～16:00 国際子ども図書館 アーチ棟1階 研修室1

本展示会監修者の川端有子氏（日本女子大学教授）を迎え、1970年代以降の翻訳児童文学の多様性についてお話しいたします。

※対象は中学生以上で、事前のお申込みが必要です。詳細は国際子ども図書館ホームページのイベント情報をご覧ください。

イベント情報URL <http://www.kodomo.go.jp/event/event/event2016-03.html>

○問合せ先

国立国会図書館国際子ども図書館 資料情報課 展示係

電話 03（3827）2053（代表）



お知らせ

■ 講演会「私が子ども時代に出会った本—中島京子」

国際子ども図書館では、4月23日の「子ども読書の日」にちなんで、日本ペンクラブとの共催で講演会シリーズ「私が子ども時代に出会った本」を開催しています。

シリーズ第4回となる今回は、作家の中島京子氏をお招きし、子ども時代の読書や出会った本に関する体験談を伺います。

子どもの頃に読んで感動した本は、いつまでも心に残るものです。自身の読書体験を振り返ったり、子どもの読書活動についての関心と理解を深める機会として、ぜひご来場ください。入場は無料です。

- 日 時 4月23日（土）14:00～16:00
- 会 場 国際子ども図書館 アーチ棟1階 研修室1
- 講 師 中島 京子 氏（作家）
- 対 象 中学生以上（定員100名）
- 申込開始 3月8日（火）
- 申込方法

次のいずれかの方法で、1通につき参加希望者1名をご記入の上、お申し込みください。定員に達した時点で受付を終了します。

[申込みフォーム]

国際子ども図書館ホームページのイベント情報にある参加申込みフォームからお申し込みください。お申込みには電子メールアドレスが必要です。

イベント情報URL <http://www.kodomo.go.jp/event/event/event2016-04.html>

[往復はがき]

「往信用裏面」に①氏名（ふりがな）、②年齢、③郵便番号、④住所、⑤電話番号、「返信用表面」に返信先の①郵便番号、②住所、③氏名をご記入の上、下記申込み先までお送りください。

※いずれも、2週間以内にメールまたは返信はがきでの連絡がない場合は、下記問合せ先にご連絡ください。

○問合せ・申込み先

国立国会図書館国際子ども図書館「4月23日講演会」担当

〒110-0007 台東区上野公園12-49

03（3827）2053（代表）

お知らせ

■ 新刊案内 国立国会図書館の 編集・刊行物



レファレンス 780号 A4 154頁 月刊 1,000円（税別） 発売 日本図書館協会

平成28年の年頭に際して

高度道路交通システム（ITS）―歴史と現状―

議員立法はどのように行われてきたか

英国における対EU関係の見直し―権限バランスレビューと「残留・離脱」
国民投票―

ドイツ連邦議会における議会公文書の管理状況―ドイツ連邦議会公文書館と
公文書館規則を中心に―

米国における金融消費者保護局の設立と展開

アベノミクスと格差の関係についてどのように考えるか―インフレが格差に
及ぼす影響を中心に―

入手のお問い合わせ

日本図書館協会

〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14 電話 03（3523）0812

訂正

本誌658（2016年2月）号「占領期日本における華僑の出版物」17ページに誤りがありました。

【参考文献】欄の上から3つめの「○」および注16の2行目冒頭の人名

（誤）傑劉・川島真 編『1945年の歴史認識：〈終戦〉をめぐる日中対話の試み』

（正）劉傑・川島真 編『1945年の歴史認識：〈終戦〉をめぐる日中対話の試み』

お詫びして訂正いたします。

C O N T E N T S

- 02 <Book of the month - from NDL collections>
Postal route map: Measuring the distance that a letter travels
- 04 Archiving earthquake disasters
Records of earthquake disasters in the NDL Digital Collections
- 12 The NDL Great East Japan Earthquake Archive “HINAGIKU”
- 14 Activities on the Great Hanshin-Awaji Earthquake Disaster Materials Collection of Kobe University Library
- 18 Activities on the Great East Japan Earthquake Archive Miyagi
- 22 Draft drawings of “The Smiling Book,” a *chirimen* (crepe paper) book by Takejiro Hasegawa
- 20 <Tidbits of information on NDL>
Archiving to make a new start
- 21 <Books not commercially available>
○ *Wasurenai asu no tameni. Fukkō e no messēji: Niigataken chūetsu daishinsai fukkō 10nen kirokushū*
- 29 <NDL NEWS>
○ Rules & Regulations
○ 7th meeting of the Council on Organization of Science and Technology Information
- 31 <Announcement>
○ Renewal of the Children's Library and the Meet the World
○ Exhibition commemorating the renovation of the International Library of Children's Literature: “Facing the Reality, Soaring in the Fantasy: Fifty years of modern Japanese translations of children's books from abroad”
○ Lecture “Books I encountered in my childhood: Ms. Kyoko Nakajima”
○ Book notice - Publications from NDL

国立国会図書館月報

平成 28 年 3 月号 (No.659)

平成 28 年 3 月 1 日 発行

発行所 国立国会図書館
編集者 小寺 正一
〒100-8924 東京都千代田区永田町 1-10-1
電話 03 (3581) 2331 (代表)
FAX 03 (3597) 5617
E-mail geppo@ndl.go.jp

印刷所 株式会社 正文社印刷所

本誌に掲載した論文等のうち意見にわたる部分は、それぞれ筆者の個人的見解であることをお断りいたします。
本誌に掲載された記事を全文または長文にわたり抜粋して転載される場合には、事前に当館総務部総務課にご連絡ください。
本誌 517 号以降、PDF 版を当館ホームページ (<http://www.ndl.go.jp/>) > 刊行物 > 国立国会図書館月報でご覧いただけます。

表紙・本文 中性再生紙使用



『神戸百景』 から「神戸中央郵便局」
川西英〔画〕 神戸百景刊行会 昭和37（1962）年
1冊 35 c m
「国立国会図書館デジタルコレクション」でご覧になれます
（館内限定）

国立国会図書館月報

平成28年3月1日発行（毎月1回1日発行）
（3月号通巻659号）